バカとSPECと召喚獣

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとＳＰＥＣと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ８２５４Ｏ

【作者名】
ｆｏｒｄｆｏｒｅｓｔ

【あらすじ】
当麻紗綾は私立文月学園高等部に通う高校二年生。そんな彼女はＩＱ２０１の頭脳の持ち主である。にもかかわらず常識はずれな言動や行動が目立ち、挙句の果てには振り分け試験を無断欠席する暴挙に出る始末。結果的にＦクラスになった紗綾と二年を代表するバカである吉井明久とクラスメイトたちの試召戦争の行方は？

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　／　Ｆ　ＣＬＡＳＳ（前書き）

この作品は「ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課　未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバーです。また、若干言動がＫＹな部分も大量にありますので注意。
また、舞台の関係上、当麻紗綾の年齢が高校二年生（１６～１７）まで若返っています。

Prologue ／ F CLASS

＞i14789―2052＜

――人間の脳は普段10%しか使われていない、残りの90%にどんなスペックを持っているのか、いまだに解明されていない。

当麻紗綾、私立文月学園高等部2年生。

クラス：F。

理由：振り分け試験当日無断欠席のため。

本人の弁解：「どこのクラスに行ってもぉ～、同じですからぁ～、どうせ行くならぁ～、Fが一番面白そうなのでぇ～」

学園長の判断：「はぁ、このクソジャリは」

なお、当麻紗綾の本来の成績は「A」クラスオーバーである。

その日、当麻紗綾は『ホーキング、宇宙の全てを語る』を読みながら考えふけていた。

「宇宙マジスゲェー」

「あ、紗綾」

その時、吉井明久は歩いてくる紗綾を見て声をかける。

「ん？　おー、アッキー。おっはー」

「そ、それ古いよ？」

紗綾の時代遅れな挨拶に明久は若干引いた。

「それにしても珍しいね、紗綾っていつも一番にクラスに入っていたのに」

「ん？　だって餃子をこっそり食べるのにちょうどいいから」

「そ、そうなんだ」

さらに引き気味になる明久だが、特有の香ばしいにおいを嗅ぎ取ったのか、鼻をヒクヒクさせる。

「また餃子弁当？」

「イエースッ！」
「ああ、また教室がニンニクで……」

◇

「遅いぞお前ら！」
「おはようございます鉄人」
「おっはー、テッチー」
極端なまでのバカと天才が揃ったことで西村宗一は頭を抱え込んだ。
「もういい、お前らのクラスはこれだ」
そんな二人に封筒を手渡すと、明久と紗綾はすぐに開ける。

吉井明久：Ｆクラス
当麻紗綾：Ｆクラス

「ああ、Ｆかー」
「ほーたーるのーひーかーりぃー」
落ち込む明久と、対照的に蛍の光を熱唱する紗綾だった。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　／　Ｆ　ＣＬＡＳＳ（後書き）

やっちまったＺＥ☆
久しぶりの作品がＳＰＥＣ×バカテスってその組み合わせおかしすぎだろ！
ＢＡＫＡなのオレ！？

と言うわけで書いちゃった以上、仕方ないですね。続けれるかどうか分かりませんが。
それ以前に小説としてのルールを無視しまくってる気がしてならないのだが。

と言うわけでなんか勢いだけで始まりましたバカとＳＰＥＣと召喚獣。
ＳＰＥＣってドラマ、最初はノータッチだったのだが、金曜日にたまたまＣＢＣにチャンネルを変えたときに「キター！」となりました。
いや、衝撃的ですよ。
ちょっとオイラｗｋｗｋしてきたじゃないか！

すまん、自重自重。
とまあ、そんなこんなで始まってしまったわけだが……当麻紗綾の言動あっているのか不安スグル。

とりあえず１巻を引っ張り出しながら、当麻紗綾の言動の傾向を考えつつキーボードを打たないと……。

だけどこの組み合わせって結構面白そうだな、かなりピーキーだがねっ！（まさに外道）

Ｑ１　／　Ａ　ＣＬＡＳＳ（前書き）

本作は、ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課　未詳事件特別対策係事件簿～とバカとテストと召喚獣のクロスオーバー作品となっております。

Q1 ／ A CLASS

＞i14789―2052＜

「スゲェー！」

当麻紗綾は、Ａクラスの教室を見て叫んだ。

「うん、確かにすごいね」

吉井明久もＡクラスの教室を見て息を呑んだ。

エアコン、リクライニングシート、システムデスク、ノートパソコン、どれをとっても一級品ばかりだ。

「って、紗綾さ、そろそろ行かないと……って紗綾ぁ！」

明久は、勝手にＡクラスの教室に入っていく紗綾を見て驚いた。

「紗綾はＡクラスじゃないでしょ！」

紗綾を追って明久もＡクラスの教室に入っていく。

「あれ？　あなたたちは？」

そこへ木下優子が明久と紗綾に話しかけてくる。

「あ、えーっと、ぼくたちは……」

「Ｆクラスのぉー、当麻紗綾でぇーっす。そしてこっちが吉井明久、通称アッキーでぇーっす。ヨロシコ」

明久が説明しようかどうか迷っているところを紗綾がＫＹぶりのアクセル全開で自己紹介をする。

「え？　あの当麻さん？」

紗綾の名前を聞いたとたんに優子は驚いた。

「ん？　んん？　アタシを知ってるのかにゃ～？」

「ええ、当麻紗綾と言えばＩＱ２０１の頭脳を持つ天才で、文月学園一の奇人で有名ですよ」

「え？　ＩＱ２０１？」

優子のＩＱ２０１発言に明久が反応する。そんな中、当の本人は……。

「くわっぱ！」

某一部が残念なマジシャンが銀幕一作目で唱えた謎の呪文を唱えていた。
「……本当に？」
「……天才とバカは紙一重って本当のことだと今なら思えるわ」
明久と優子はお互いにため息をついた。
「これから大変そうだよ」
「そうね、まあがんばりなさい」
明久の諦めに優子は優しく応援の言葉をかける。
「ラミパスラミパスルルルル……」
紗綾は、空気を読まず昔の魔女っ子アニメの呪文を口走っていた。

Ｑ１　／　Ａ　ＣＬＡＳＳ（後書き）

相変わらず描写がヘタすぎだろ俺。
と言うわけで、第１話です。
オリジナルに無い優子と明久（それと紗綾）の邂逅ですが……無理ありすぎだろＪＫ。
ＳＰＥＣも第５話に入り、色々と加速してきてｗｋｔｋが止まらないっ！
それにしてもＳＰＥＣとバカテスのクロスオーバーって無謀だなぁと今更ながら思っている。
だけど反省しないっ！
とりあえず頑張ってみるお。あとダーツとかＤＤＲとか。
うん、とりあえずバカテス１巻当たりまでがんばってみよう、うんがんばろう。
あ、あと明久×紗綾は無いつもりです。

Q2 ／ CLASS ROOM（前書き）

本作は「ＳＰＥＣ」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバー作品となっております。また若干キャラクター崩壊も始めてます。

Q2 ／ CLASS ROOM

>i14789—2052<

「って紗綾！　時間、時間！」

吉井明久は、Ａクラスの教室の黒板の上にかかっていた時計を見て慌て始める。

「ん？　おろろ？　あやー、遅刻確定っぽいって感じ～？」

「確実に遅刻ね」

当麻紗綾の間伸びした発言に、木下優子は冷静に答える。

「し、失礼しましたー！」

明久は紗綾の右腕をつかんで、Ａクラス教室を後にする。

「ちょーーーーーーーーーーーー」

ついでに紗綾は、妙な叫びを上げた。

◇

Ｆクラスの教室の前にやってきた明久と紗綾は、窓ガラスから少しだけ見える教室の様子を眺めて…。

「こ、これは……」

「ウホッ！　いい廃墟……」

明久は絶句、紗綾は某公園のベンチに座っている「やらないか」と言って来る男にホレた男の台詞をベースにアレンジを加えた台詞を口走っていた。

「と、とりあえず入ろうよ」

「よっしゃー！」

明久が促すのと同時に紗綾は教室のドアを文字通り勢いよく開けた。そして、あっけなく崩れ落ちた。

「早く座れ、このウジ虫野郎」

そこへ坂本雄二が教室のドアに向かって明久に向かって言った…

…はずだったが、そこにいたのは紗綾だった。刹那、突如として紗

綾はその場に、まるで子供が親におもちゃを買ってもらうためにダダこねるような感じでゴロゴロと転がっていた。
「ひどい、ひどいよー、学校内いじめだー」
「文月名物コロコロ紗綾……」
紗綾の奇行に明久は一人ごちた。
「雄二も、ちゃんと相手を見ようね！」
「あ、ああすまんかった……それよりもコイツをどうにかしてくれ」
雄二を指差した先には、いまだにゴロゴロと転がる紗綾がいた。
「うん……紗綾、大丈夫だから……」
「チッ」
「今、舌打ちしただろっ！」
明久が声をかけたとたんに紗綾は舌打ちをし、それに雄二が反応した。
「で、スロープはなにしてるの？」
それからすぐに立ち直った紗綾は、すばやく雄二に尋ねる。
「おい！　まあ、いい。俺はこのクラスの代表だからな」
「あっそ」
雄二の回答に紗綾は、そっけなく理解した。ひと段落したところで明久は改めて教室を見渡す。腐りかけた畳、ひび割れた窓、綿が抜けきっている座布団、今にも足が折れそうなちゃぶ台。
「これは酷い」
「ひどっ！」
明久のつぶやきに紗綾は全力で答えた。
「あっさり言うなっ！」
紗綾の反応にクラス内の大半の男子が一斉にツッコミを入れた。

Ｑ２　／　ＣＬＡＳＳ　ＲＯＯＭ（後書き）

色々と話が動き出してｗｋｔｋが止まりませんっ！
というわけでＱ２でした。
いやー、ＳＰＥＣ面白いですよＳＰＥＣ。予測が不可能ですよマジで。
そういえば今月の２０日はｋｉｎｅｃｔですよ！ｋｉｎｅｃｔ！
気になる人は是非体験してみて欲しいです！
あ、あとＳＰＥＣのノベライズ本をＧＥＴ！
そういえばＳＰＥＣに出てくる「中部日本餃子のＣＢＣ」を出すべきか否か悩んでいるが……大丈夫か？
あといまだに出てきていない瀬文さんを、どんな役柄で出すべきか……教師かな？
あとＳＰＥＣを出すか出さないか、出すにしてもどんなＳＰＥＣを出すべきか。
いろんな意味で悩んでいます。
あ、あと野々村さんもどうしよう……。
色々とＳＰＥＣの要素もバカテスの要素に絡めて見たい……。
無謀な事に挑戦してみるのって難しいなオイ。

Q3 ／ ACTERS（前書き）

本作は「ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバー作品となっております。また、キャラクター崩壊がビックリするほどユートピアなまでに進んでおります。

Q3 ／ ACTERS

＞i14789―2052＜
「まあ、とりあえず早く座れウジ虫共」
「って二人同時っ！」
坂本雄二の反省の色なしの発言に吉井明久は条件反射的にツッコミを入れる。
「チッ」
当麻紗綾は舌打ちを打った
「また舌打ち打っただろっ！」
それに再び雄二が反応する。
「ま、まぁまぁ、紗綾もやたらめったら舌打ちしないの」
そんな二人の間に明久が割って入り、双方をなだめる。主に紗綾の方を重点的に。
「あのー、はやく席についてもらえますか」
そこへ、一人の初老の男が入ってきた。
「はい、わかりました」
「うーっす」
明久と雄二は、それぞれ返事をして席に座る。
「あ、福原先生だ。おはようございやす」
紗綾は初老の男を知っているような態度で、ヘンテコな挨拶をしてから席に座る。
「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」
「おっはー」
福原の挨拶に対し紗綾はマヨネーズを容器の口から吸う某ママの挨拶をした。
「それ古いよっ！」
そこに明久がツッコミを入れる。

「はいはい、そこの人たち静かにしてください」
「あ、すいませ――」
福原の注意に明久が謝ろうとしたとき、教卓が、音を立てて、崩れた。ただ、福原の軽い一叩きだけで教卓は、ゴミ屑へと変わり果ててしまった。
「え～……替えを用意してきます。戻ってくるまでの間、自己紹介をしてください」
福原が気まずそうに言うと、そそくさと教室を足早に出た。
「どんだけー」
紗綾の言葉が空しくFクラス教室中に響き渡った。
「言わないで、心が折れそうだから」
明久は、涙が出るのを必死でこらえていた。周りの男子生徒も同じようにこらえていた。
「しかたねぇな。そんじゃま、廊下側から一人ずつな」
そんな状況を変えるべく、雄二は教卓が少し前まで存在していた黒板の前に立って仕切り出す。
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」
秀吉の自己紹介に、明久はときめき、周りの男子生徒も同じくときめいていた。
「……土屋康太」
康太は、名前を告げただけですぐに席に再び座る。しばらく男子生徒の自己紹介が続き明久は飽きてきた。
「――です。海外育ちで、日本語で会話は出来るけど読み書きが苦手です」
そこへ女生徒の声が明久の耳に飛び込み、すこし希望を見出していた。
「趣味は吉井明久を殴ることです☆」
その最後の一言で明久は、絶望のどん底へと落ちた。その様子を見て紗綾は爆笑した。
「はろはろー」

「あうっ……島田さん」
「吉井、今年もよろしくね」
島田美波は、笑顔で明久に声をかけた。その瞬間、クラスの大半の男子生徒から殺気が沸き立った。
「おや、進んでいますね。坂本君、ありがとうございます。続きは私の方で行いますので席に戻ってください。では、次の方」
そこへ福原が戻り、進行役を変わってもらい雄二は席に戻る。そして再び自己紹介が始まる。

◇

ようやく明久の出番となった。
「面白珍自己紹介期待してやす」
紗綾の期待しているのかしていないのか分からない応援を背に、明久は教卓……があった場所に立つ。
「えーっと、吉井明久です。気軽津軽に『ダーリン』と呼んで下さいね♪」
『ダーーーーーーーーーーーーリィイイイイイイイイイイイイイン！！！！！！！！！』
明久のダーリンと呼んでね宣言から刹那、一斉にダーリンコールが教室中に響き渡る。この状況に紗綾は一人大爆笑していた。
「うしゃしゃしゃしゃしゃっ！」
どこぞの売れっ子マジシャンを自称している女の笑い方に似ていた。
「……失礼。忘れてください。よろしくお願いします」
明久は、某ボクシング漫画の試合後に真っ白に燃え尽きたかの様な様子で席に戻る。
「立て、立つんだ、アッキー！」
「僕は、ジ〇ョーじゃないからねっ！」
なぜか明久と紗綾のやり取りには殺気が沸き立たなかった。ソレ

もそのはず、当麻紗綾は確かに天才だが、それ以上に奇人変人の噂が絶えず、彼女に言い寄ろうと思う男はほとんどいなかった。そんな中で彼女とごく自然に喋れる数少ない男が、明久だけだった。
「あの、遅れて、すいま、せん……」
その時、教室の扉が開いた。
『え？』
「およ？」
教室中の大半の男子生徒が疑問の『？』を浮かべた。紗綾は、一人キョトンとしていた。明久は、心当たりがあるのか「あっ」と口から漏らす。にわかに騒がしくなる教室の中で、冷静にいたのは明久と担任である福原だけだった。
「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」
「あ、はい！　姫路瑞希と言います。よろしくお願いします」
瑞希は、その小柄な身体をさらに縮みこませるかのようにして声を上げた。
「アッキー、なんで姫路さんがFクラスに？」
紗綾は、隣にいた明久に尋ねる。当日、クラス振り分け試験に無断欠席していた紗綾にとっては予想外の事件だった。
「えーっと確か当日の試験中に姫路さんが熱を出しちゃって、それで途中退席になっちゃんだ」
「なるぺそ」
明久の答えに紗綾は納得がいった。試験中に途中退席した場合、例外なく0点になるからだ。ちなみに紗綾は無断欠席のため当然ながら0点である。
「僕も、姫路さんが心配だったから保健室まで付き添ったんだ」
「ほほー、アッキーやるぅ！」
明久がこっそりと言うと紗綾は思いっきり明久の背中をバンバンと叩いた。
「痛いっ！痛いよっ！」

ほぼ同じような質問に対し瑞希が男子生徒たちに答えたのをきっかけに騒がしくなっていたが、そんな中で明久と紗綾のやり取りを見ていた者が二人いた。美波と瑞希は、明久と紗綾のやり取りを見て、ムッとした。

（なんで当麻さんがここに？　それにしても吉井君とあんなに仲良く話せて羨ましい）

（吉井のバカ、ウチの気持ちに早く気づいてよ。それと当麻、吉井から離れてよ！）

そんな風に考えが瑞希と美波の頭の中によぎったのと同時に二人は、明久のそばの席へ向かった。

「おろろ？　面白い状況になっちった」

そんな二人の恋する乙女の様子を見て、紗綾は笑った。

（願わくば、そんな二人の恋が実りますように）

普段の紗綾からでは思わないであろう思いを紗綾は祈った。

Q3　／　ACTERS（後書き）

もう、クライマックスに向けてストーリーがアクセル全開なＳＰＥＣの続きが気になるっ！

というわけで第3話となって一通りバカテス側の登場人物が揃いました。あとはＳＰＥＣ側の登場人物の配置をどうすべきか……。野々村係長は用務員として出すつもりです。もちろん柿ピーも出ます。瀬文さんはどうしよう？

さて、ノベライズ版ＳＰＥＣ1巻とバカテス1巻を同時に読みながら書いているのですが、俺の描写のヘタさが崩壊を助長させてるような間違いなく。うう、俺に小説を書くＳＰＥＣさえあればっ！

あと気づいていると思いますがシリーズの名づけに関してはドラマ版のようにしています。

最近ＲＩＯＴ　ＡＣＴ2を再びやっていますが、たまに遊ぶと面白いなこれ。肩肘張らず、ちょっと広めのおもちゃ箱と思って遊べば結構楽しいよ。もしオンラインで見かけたら、そのときはいらっしゃいやせ。ちなみにゲーマータグはｆｏｒｄｆｏｒｅｓｅｔです。

ああ、のどが痛い。風邪気味というか風邪だな。治さんとなぁ。

Ｑ４　／　ＷＡＲ　ＳＴＡＲＴ（前書き）

本作は「ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課　未詳事件特別対策係～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバー作品となっております。そしてキャラクター崩壊がゲシュタルト崩壊、ベルリンの壁崩壊並みに崩れまくっております。中部日本餃子のＣＢＣは、いずれ出ます。世界観がどすこい崩れている可能性も出始めたＹＯ。

Q4 ／ WAR START

＞i14789―2052＜

それから、姫路瑞希は一目散に吉井明久の隣へ座る。それを見た島田美波も明久の隣の席へ移る。

「ククク、あからさまじゃないの」

瑞希が来た時点で当麻紗綾は、木下秀吉の隣の席へと移っていた。

「おぬしも相変わらずじゃのう」

秀吉は紗綾に苦笑しながら言う。

「んー、だってぇー面白そうじゃないのぉー。このV字ラブトライアングルがぁ」

紗綾は明久、瑞希、美波の三人が陣取っているちゃぶ台に人差し指を向ける。それに向けて秀吉が顔を動かす。

「そういうことなのかのう？」と秀吉。

「そういうことジャンガリアン」と紗綾。

「えー次の方……当麻さん、お願いします」

そこへ福原慎が紗綾に言う。

「へい」とやる気なさそうに紗綾は返事をした。

「当麻紗綾です、一年間よろしくお願いしやす」

紗綾は揉み手せんばかりに挨拶をした。

その時、坂本雄二と明久はこっそりと教室から出る。

（戦争か？　試召戦争か？）

紗綾は持ち前の頭脳でそう分析し、内心期待をしながら席へ戻る。再び大半の男子生徒の自己紹介が始まる。

「そういえば挨拶がまだでしたな姫路さん、島田さん。当麻紗綾です、一年間よろしくお願いし安値更新ストップ高」

どこか日本語として成立していなそうな挨拶を瑞希と美波に言う紗綾。

「そしてお二方のアッキー争奪ラブウォーズを応援しております」

「えっ！？」と瑞希。
「えっ！？」と美波。
「だってぇー姫路さんも島田さんも一年の頃、アッキーに――」
「だ、だめー！」と瑞希。
「い、言わないでー！」と美波。
「えー、そこの方たち。静かにしてください」
福原が紗綾、瑞希、美波に注意をする。紗綾が謝ろうとしたときだった。再び教卓はゴミ屑と化した。

◇

数刻後、二度目の交換となった教卓の前に雄二は立っていた。
「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」
「よっ！　大統領！」
「……まあそこの女として全てが終わっている奴は放っておくとして……さて、皆に一つ聞きたい」
雄二の言葉に再びその場で駄々こねる紗綾を見て明久は再びなだめる。そして他の男子生徒は、紗綾のことを無視して雄二を注目していた。雄二が目線を動かすたびに男子生徒たちも目線を動かす。
かび臭い教室。
古く汚れた座布団。
薄汚れたちゃぶ台。
どこからもってきたのか分からない「留波庵座佐渡衛門（るばんざさどえもん）」の指名手配書。
明久も、
瑞希も、
美波も、
秀吉も、
土屋康太も、

福原も、
須川亮も、
なぜかいた用務員の野々村光太郎も、
同じく、なぜかいた新任英語教師の瀬文焚流も、
そしてどこからか入ってきたのか分からない三毛猫も、
雄二の視線につられて周りを見渡した。
「って何で野々村さんと瀬文先生がいるの！？」
そこで明久は激しくツッコミを入れた。
「おお、吉井君。わしは瀬文君をF組まで案内をしにきたのじゃが……坂本君、いい代表っぷりだねぇ。将来いいリーダーに慣れそうじゃ」と野々村。
「自分は、今月からF組の副担任として着任しました！」と瀬文。
「こら明久、余計な事を言うなら屋上から紐なしバンジーさせるぞ」
「ってさりげなく死刑宣告ぅ！」
「とまあ明久も放っておいて……Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」
さめざめと泣いている明久を野々村が慰めて、普段持ち歩いている柿ピーの瓶の蓋を開けて明久に少し渡す。その様子を見ていた福原は「あのー、一応授業中なのですが……」と言ったが、その瞬間に野々村が鋭い目つきで福原を睨んだ。
「――不満は無いか？」
雄二の、その一言で、堰は切られた。
『大ありじゃぁっ！』
まさにFクラス男子一同（一部を除く）の魂の咆哮だった。
「キターーーーーーーーー！」
その瞬間を聞いた紗綾は大喜びだった。それを見ていた瀬文は、懐から三五七ケシゴム弾を取り出し、紗綾の額に命中させた。
「いて」
「だろう？　俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

一度に押し寄せてくる不満の声の数々に瀬文「確かに施設は酷いが、ここに来たのは自業自得だろうが」と小声でボソリとつぶやいた。

「これは代表としての提案なんだが――」

雄二が満足そうな表情を浮かべ、周りを見渡し、何かを告げようとしたときだった。

突如、世界は、静止した。

蛇口から落ちた水滴が綺麗なクラウンを作り出したまま、崩れずそのままだった。

紗綾も、瑞希も、美波も、秀吉も、康太も、須川も、雄二も、そして明久も、誰も彼もが、その時間が止まっていた。そこへ一人の美しい少年が、教卓の上に鎮座していた。二度も軽くたたかれては崩れていた教卓が、なぜか少年の体重を支えきっていた。名前は一十一（にのまえじゅういち）。

「今年の二年生は面白いことが起きそうだね」

一はFクラスの面々を見渡しながらつぶやいた。そして明久に近づく。

「やあ吉井君」

その時、明久の時間だけが元に戻った。

「あれ？　みんな？」

「もう、つれないなぁ」

明久は声のしたほうに顔を向けた。

「えーっと、君は誰？　そして何でみんな動いていないの？」

「僕の名前は一十一。そしてこれは僕のスペックだよ」

「スペック？」

スペックという言葉に明久は頭をかしげた。その様子を無視して、一は説明をし始める。

「人間の脳って全体の１０％しか使われていないんだ。残りの９０％は未だに解明されていない。僕はその９０％が目覚めた人間の一人だよ」
「え？　え？」
ますます明久は混乱していった。
「うーんっとね、ようするに超能力者と言えば分かるかな？」
「なるほどっ！」
明久は納得がいき、
「じゃあ、これも一君が？」
「十一でいいよ、これが僕のスペック……そして僕が現れた理由は、吉井君……君に伝えたいことがあるんだ」
一は明久の横に立ち、そして呟いた。
「君は、今年の……いや文月学園全体の鍵になるよ」
そして一は指を鳴らす。
「それってどういう……」
明久が言おうとした瞬間、時は既に戻っていた。
「――ＦクラスはＡクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う……って明久、何時の間にお前は立っていたんだ？」
雄二は戦争開始の宣言をすると同時に、雄二や周りの者たちにとってみればいつの間にか立っていた明久に疑問がわいていた。
「まさか……一……」
紗綾だけが、その真相にたどり着いていた。

Ｑ４　／　ＷＡＲ　ＳＴＡＲＴ（後書き）

というわけでＳＰＥＣ側の主要人物が揃いました。瀬文さんはＦクラスの副担任となったが今回の話では空気になってしまったｏｒｚそしてゴリさんは予定通り用務員として登場。もちろん柿ピーもね。そして一十一も登場。行き当たりばったりに書いていたら風呂敷広げすぎたっ！

うう、辛いお。

ＳＰＥＣも終焉に向けてアクセルがギュンギュンです。予想不可能。もう目が離せないっ！　早く金曜になれっ！

ノリと勢いだけで始まったバカとＳＰＥＣと召喚獣、自分の中ではバカスペと略していたりしてちょっと気に入ってたりしてる自分ガイル。

もうね、小説を書くＳＰＥＣが欲しいよ。そしてシリーズを癸までもっていきたい。

あと私的なことですがメッセージを返すことがほとんど無いと思いますがきちんと読んでいます。そして感謝しています。その感謝の気持ちを作品に出すことで表せたらいいなとも思っています。機会があれば返信しようかと思います。遅くなると思いますがごめんなさい。

さて、次回はバカテス一巻の第三問部分に突入します。紗綾の召喚獣どうしようか悩んでいます。餃子を出すべきか否か……それが問題だっ！

それと作品とは関係ないのですがたまにＸｂｏｘ３６０で出没することもあります、見かけたときは対戦相手ならボッコボコにしてやってください。ちなみにゲーマータグは【ｆｏｒｄｆｏｒｅｓｅｔ】です。ゲーム楽しもうぜ！
あーｋｉｎｅｃｔ欲しいなぁ。

それとツイッターもやってます、そっちは【@ｆｏｒｄｆｏｒｅｓｔ】です。自由にフォローしても大丈夫です、フォローされたらこちらもフォローしますが、よろしくです。

Ｑ５　／　ＳＰＥＣ（前書き）

本作は「ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課　未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバー作品となっております。またキャラクター崩壊及び原作崩壊がイエローイエローハッピーに進んでいます。また作者の描写能力の無さも加味されて文章が崩壊している危険性もどすこいあるＹＯ！

Q5 ／ SPEC

＞i14789―2052＜
「えーっと、DI○のあれを――」
「ダウト」
「――やって・・・・・・っていきなり！」
吉井明久がいつのまにか立っていたことに対する弁明の途中で坂本雄二は、すっぱりとダウト宣言した。
「アッキー、ちょっとついてきて」
「って、紗綾どうしたの！？」
明久の右腕を当麻紗綾は左手でつかんで教室から出る。
「って待ちなさいよ！」
「待ってください！」
それを見て姫路瑞希と島田美波も教室から出た。
「授業中ですよー！」
それを呆然と見ていた福原慎は、弱弱しく注意の言葉をかけるだけだった。
「なんじゃったんだろうか？」
木下秀吉の呟きが静寂に包まれた教室に響いた。

◇

「アッキー、一つだけ聞きたい事がある」
屋上で、紗綾は明久に向かいながら告げる。
「あんとき、一と出会ったでしょ？」
「え？　十一君知ってるの！？」
明久のおどろきに紗綾は「やっぱり……」と舌打ちしながらつぶやいた。
「あんときに起きた事は全て事実。アッキーには、理解してもらわ

ないといけないことがあるのよ……あとそこでコソコソと隠れている二人！」
紗綾が屋上と校舎内を繋ぐ扉に向かって叫ぶ。その向こうにいた者はビクリとした。そして扉が開き、そこから現れたのは……。
「って島田さんと姫路さん！？」
そう、美波と瑞希の二人だった。
「さてと、今年の一番のキーパーソンが三人も揃ったし……説明でも始めますか」
紗綾がそういいながら、どこから持ってきたのか分からない真っ赤なキャリーバッグを開けて、中からスケッチブックを取り出す。
「吉井君、もしかして当麻さんと既に？」
「吉井、あんた当麻と付き合ってるの？」
二人は明久に詰め寄る、その身体の回りに殺意のオーラをまとっていた。
「ちょ、二人とも、落ち着いて！」
「プスプスプスプス」
その間に紗綾がプスプス言いながら割って入る。
「はいはい、今からちょっと説明するから……あとアッキーとは何も無いから安心しなさい！」
そう言いながら、スケッチブックを一枚めくる。
「ほっ」と瑞希。
「ほっ」と美波。
「二人とも、仲いいね」と明久。
「さーてーとー、ではでは始まり始まりー。とーまさやのーよくわかるスペック講座ーいえー」
紗綾は、妙なノリでクルクルと回っていた。明久、瑞希、美波は、そのノリについていけなかった。
「まず、これだけは知っておいて欲しいけど……人間の脳は普段は十パーセントほどしか使われていません。残りの九十パーセントは未だに眠ったままです」

「つまり、その残りの九十パーセントには、まだ誰も知らないような能力があるということですか？」
瑞希の疑問に対し紗綾は縦に首を振った。
「そう、たとえば映画『キューブ』で障害を持った男が一瞬にして天文学的な数字の因数分解を一瞬にして解く驚異的な計算能力が描写されたりしてますが、あれは『サヴァン症候群』と言って、実際に存在する人間の能力です」
「サヴァ……？」
紗綾は一九九八年公開の映画を題材に説明したが、明久には理解できていなかった。
「サヴァン症候群ですよ吉井君。何らかの障害を持った人がある特定の分野において普通の人では及ばない能力を発揮する症状ですよ」
そんな明久に、分かりやすく説明する姫路。
「つまり、さっき吉井がいつの間にか立ち上がっていたのもスペックの？」
美波が紗綾に問う。
「もちのろん、一という奴がそのスペックの持ち主であることは私自身、身をもって体験しています。そのせいで私の餃子弁当食べられましたので」
なんともやるせない被害に明久は、先ほどまでの紗綾のシリアスな口調との落差に開いた口が文字通りふさがらなかった。
「それぐらい、いいじゃん」
そうつぶやいて一人ごちた。
「まだ、信じられません」と瑞希。
「そうね、そんなこと急に言われても」と美波。
「それもそうだけどさー、この先さらに人間が進化したらそんな能力があっても不思議では無い可能性もゼロではない。今スペックを持っている人間はいち早く進化した者を言っても過言ではありません」
そういいながらキャリーバッグから紙の束を取り出し、瑞希、美

波、明久に渡す。
「これはＭＩＴにいるメール友達から渡された論文のコピーですが、どうやらアメリカやフランスなど諸外国においてもスペックは稀に確認されているみたいです」
なぜか論文を書いた者の署名がバールのようなもの片手に活躍する理論物理学者だったが、そんなことは明久も、
瑞希も、
美波も、
なぜかそこにいた雄二も、
同じくなぜかそこにいた秀吉も、
さらに同じくなぜかそこにいた土屋康太も、
なぜかＫＫＫよろしく灰色の装束で灰色の三角ずきんを被ったＦクラス男子生徒も、
なぜかいた瀬文焚流も、
なぜかいた野々村光太郎も、
その野々村に連れて来られた福原も知らない。
「って、いつのまに！？」
「当麻がスペックと言ってるあたりからだ」
明久の驚きに対し雄二は冷静に答える。
「んじゃまスロープ、今後はひょっとしたらスペックを持った生徒に会うかも知れないから気をつけ論文」
「つーか普通に授業時間を無視してんじゃねえよ、とんま」
瀬文が再び三五七ケシゴム弾を取り出して紗綾の額に当てた。
「いて！」
「瀬文先生、ケシゴムを飛ばす技術がすごいのう」
秀吉のつぶやきは、風によってかき消された。
なお、明久はＫＫＫ風の衣装に身を包んだ男子生徒に追いかけられていた。その理由は――。
「せっかくの美少女二人をはべらして羨ましいぞ！　死ね！」
――だった。ちなみに紗綾は奇人変人の噂もあってか美少女にカ

ウントされていなかった。

Ｑ５　／　ＳＰＥＣ（後書き）

というわけで第５話はスペックに関する説明に話が大きく逸れました。次こそバカテス１巻第３問の部分に入るぞ！
ＳＰＥＣではレインマンを例に挙げてましたけど本作ではＣＵＢＥを例に挙げてみました。理由はただ一つ、俺がレインマン見てないから！機会があれば見てみようと思っています。またＣＵＢＥはお気に入りの映画でもあったりします。

本当に小説を書くＳＰＥＣが欲しい。ベリー欲しい。どすこい欲しいＹＯ。

あと、本作における恋愛描写ですが最初からフルスロットルで行きます。そのあたりも本作の楽しみになればいいなと思ってたりします。出来ればヒロイン二人が幸せになれる展開に出来たらいいなと思っています。それに何度も言っていますが明久×紗綾の展開はミジンコほどありません。

それと感想はきちんと読んでます。感想を執筆の燃料にがんばっていきます。続けれるかどうか不安ですが、今後もよろしくです。

あと、シリアスな感じな雰囲気もありますが基本はコメディー路線で行きたいです。重い話とか苦手なので出来る限り明るい感じで行きたいです。

それと最近久しぶりにＲｅｄ　ｄｅａｄ　ｒｅｄｅｍｐｔｉｏｎをプレイしてたりしています。もし放浪モードで見かけたらヘッドショットをかますなり何なりとｗ

あー、リベリオンのＤＶＤが欲しい。あとｋｉｎｅｃｔも。

＜本作の裏話＞

【瀬文さんが英語教師の理由】

英語が堪能だったので英語教師にしてみました。作中で紗綾と外国語によるやり取りも再現できたら面白そうだなとか思っています。

【一十一について】

取り扱いに困っています。助けてください！

【海野先生について】

出します。予定としては保険医で。そして保健室にｏｎちゃんぬいぐるみを出してみようかと。水曜どうでしょうはＣｌａｓｓｉｃしか見てないｏｒｚ　うう、なぜ当時見なかったんだ俺ｏｒｚ（その時名古屋ではやってねぇ＋俺小学生だったｏｒｚ）

【中部日本餃子のＣＢＣ】

出します。いやマジで出す。むしろ出さなきゃいけないような気がしてならない。

【書道】

もちのろん。出しますよ。

【今回の話で出てきた理論物理学者】

ヒント：Ｈａｌｆ－Ｌｉｆｅシリーズ。ＥＰＩＳＯＤＥ３はまだかね？

＜頭の中で浮かんでは消えそうなアイデアの種（取り扱い自由）＞

【バカとテストと召喚獣×名探偵の掟】

明久と鉄人がそれぞれ天下一大五郎と大河原番三に憑依されて、数々の難事件に挑むといった感じの内容だが、俺がミステリーに対する知識が無い！誰かやってみないかい？

【バカとテストと召喚獣×よくわかる現代魔法】

こよみたちが文月学園で明久たちと共に活躍する話……これもこれで面白そうだな。

【ゼロの使い魔×ＭＡＸ　ＰＡＹＮＥ】
ある事件で犯人に撃たれたマックスが異世界ハルケギニアに召喚される、ルイズとマックスの擬似的な親子関係を表現してみたいと思っていたり。
【デュララ×インディゴの夜】
なにこれ、ボスケテ。

Q6 ／ PIECE ［PT．1］（前書き）

本作は『ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第５課　未詳事件特別対策係事件簿～』と『バカとテストと召喚獣』のファンフィクションクロスオーバー作品です。
キャラ崩壊及び原作崩壊がどすこい来ているＹＯチェケラ！
また文章崩壊しまくってるＹＯチェケラ！
姫路瑞希と島田美波の恋愛感情は最初から∞クライマックスしちゃってるＹＯチェケラ！

Q6 ／ PIECE ［PT．1］

＞i14789―2052＜

それからしばらくして、Fクラスの面々は教室へ戻っていた。

「まぁ、当麻と明久の逃避行で話は中断してしまったが、改めて宣言する。俺たちFクラスはAクラスに対して『試験召喚戦争』を仕掛けようと仕掛けようと思う」

坂本雄二の、その一言にクラス中が騒がしくなる。

『勝てるわけが無い』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいれば何もいらない』

『だが当麻は？』

『断じて美少女なんかではない』

「ひどい、ひどい、校内いじめだー」

当麻紗綾は、美少女なんかではない発言に敏感に反応し、文月学園名物ころころ紗綾をやっていた

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

紗綾の状況をガン無視して雄二は、そう宣言した。ちなみに転がっていた紗綾を吉井明久と野々村光太郎が揃って慰めていた。

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ！』

『姫路さんがいたら何もいらない！』

『当麻は？』

『いらん、むしろ捨てろ！』

「酷い！　酷いよ！　校内いじめだー」

再び暴れだす紗綾。

「静かにしろっ！」

その時、静観を通していた瀬文焚流が一喝し、教室中がシンと静まった。

「坂本、続きを」
「あ、ああ。瀬文先生、の言うとおり少し落ち着け。このクラスには勝てる要素が揃っている」
雄二がクラス中にいる生徒に自信をもって答える。
『嘘だ』
『ありえない』
『そんなものどこにあるんだ？』
「だから落ち着け、これからその説明をしてやる。そして康太、畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前へ来い」
「は、はわっ！」
土屋康太は、顔をブンブンと横に振って否定しながら前へ出る。姫路瑞希は、慌ててスカートを押さえる。紗綾は、そんな康太を鋭い目つきでにらみつける。
「女の敵」
ボソリと紗綾はつぶやく。
「紗綾、落ち着いて」
小声で明久は、紗綾を落ち着かせようとしている。
「土屋康太。こいつが、あの有名な寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」
「……！」
ムッツリーニと言われた途端に康太は、思いっきり首を振っていた。
『ムッツリーニだと』
『そんなバナナ、ヤツがＳＡＷだと言うのか？』
『お前、字が変だぞ』
『メタなツッコミ現金って標語を見てないのか？』
『オマエモナー』
『だからメタな事言うなって』
ムッツリーニの話題からメタな話題へと移っていった。
「？」
瑞希は頭の上にクエスチョンマークを三つほど浮かべた。

「つまり、ムッツリスケベで女の敵ってワケなんですよー」
紗綾が瑞希に意味を教えた。敵意たっぷりと混ぜ込んで。
「ちなみにアッキーは鈍感だからダイレクトアタックが一番だって言うのはお姉さんとの秘密だよ？」
「へ？」
「紗綾、それってどういう意味？」
瑞希が顔を赤らめているところに島田美波が横から入る。
「遠まわしはアッキーが理解できなっせ、ダイレクトに直接思いを伝えた方が懸命だっせ、島田さんは恥ずかしさを紛らわすために関節技極めているみたいだけど、それじゃー伝わらないっさ」
「ちょ！　ウチは、吉井のこと」
「バレバレでっせー。まあ、昼のときに『すき屋』の牛丼弁当あげるからたべなっせー」
ちなみにFクラス女子三人組ガールズトークは、全て小声とアイコンタクトで行われていた。恋する乙女は不可能を可能にする。
「それに姫路もいる」
「へ？　わ、私ですか？」
「ああ、一番の戦力だ。頼りにしているぞ」
『そうだ、俺たちには姫路さんがいるんだった！』
『ああ、彼女ならAクラスにも引けをとらない！』
『ひ・め・じ！　ひ・め・じ！』
『ねらー率テラタカス』
『オマエモナー』
「それに木下秀吉だっている」
木下秀吉は、照れながら席を立つ。その容姿は、他の女子よりも女子らしい。
『今日も暑いな』
『だが男だ』
『それでもかまわない』
その瞬間、秋葉原で白衣を着た自称マッドサイエンティストを語

る男がくしゃみをした。
「当然俺も全力を尽くす」
『確カニ、やってくれそうだ』
『だから五時があるぞ』
『メタなツッコミ現金プラス誤字テラ大須』
『オマエモナー』
徐々にクラス内の士気が高まる。
「それに吉井明久もいる」
その途端に、士気が一気に低下した。
「ちょっと雄二！　どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！　全くそんな必要性ないよね！」
『誰だ？』
『知らん』
『ググレカス』
『ローマの思想家だったっけ？』
『ググレカス』
『シランガナー』
「ってこのクラス、ねらー多すぎ！」
明久が叫んだ。紗綾は爆笑しながら転げまわっていた。それを見ていた瀬文が三五七ケシゴム弾を当てた。
「いて」
「ホラー！　せっかく上がってきた士気に翳りが見えてるし！」
明久が席を立って抗議する。
「そーだそーだ！　レフ・ランダウに謝れー！」
それに追随して紗綾が、まったくもって別ベクトルの方向で抗議していた。
「なんでレフ・ランダウだよ」
瀬文が冷静にツッコミを入れた。
「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ！」

その瞬間、世界が、時間が、何もかもが、静止した。雄二の隣に美しい少年が立っていた。一十一（ニノマエジュウイチ）である。

「いよいよ始まるね。明久君、期待しているよ」

パチンと音が鳴って再び世界は動き出した。そこに一の姿は無かった。

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの中の何者かが致命的な発言をした。

Ｑ６　／　ＰＩＥＣＥ　［ＰＴ．１］（後書き）

進みません。そしてすみません。
というわけで第６話、ＰＩＥＣＥ　ＰＴ．１でした。ちなみにＰＴと書いてパートと読んでください。
ＰＴ．２に続きます。終わりませんでした。

ＳＰＥＣもいよいよ今週金曜日で最終回か……なんだから寂しくなるな。もっとＳＰＥＣの世界観に浸りたかったという気持ちもあるけど、やっぱり始まりがあれば終わりも当然あるよね。
というわけで期待してます。

なお、書き方についてかなりおかしいと感じてたりしてますけど直りようが無いかも？
いかにしてバカテスのテイストを壊さずＳＰＥＣの要素を入れるかを試行錯誤（またの名を行き当たりばったり）してますが……クロスオーバーって難しいね。
バカスペにおける当麻紗綾は、ＳＰＥＣ第９話の回想シーンで出ていた紗綾ではなく、現在の紗綾をそのまま文月学園の制服に置き換えただけです。そして（ＳＰＥＣにおけるネタバレのため伏せています）なので三角巾およびギプスはつけていません。無傷です。

そろそろ中部日本餃子のＣＢＣを出したいけど、どのタイミングで出すべきか……。少なくとも数話以内に出すつもりです。

正直、風呂敷を広げに広げすぎて、どう畳もうか……これはもう……畳みきれない！ブワッ。

あと、本作中に2ちゃんネタが若干含まれていることを今更ながら

注意。

ああ、マジでｋｉｎｅｃｔが欲しい。そしてダンスエボリューション欲しい。

本当にこれ続けれるのか俺？

【小ネタについて】

〔秋葉原で白衣を着た自称マッドサイエンティスト〕

ガッツリとストーリーで泣いた俺。

〔誤字〕

ノリです。深い意味は無い。

〔だが男だ〕

ときめいたのは俺以外にもいるはず……たぶんっ！

〔ググレカス〕

定番ですね。

〔レフ・ランダウ〕

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ参照。ＳＰＥＣでも名前が出ていたよ。

Ｑ７　／　ＰＩＥＣＥ　［ＰＴ．２］（前書き）

毎度ながらですが本作は「ＳＰＥＣ～警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバーファンフィクション作品です。
文章、原作、キャラクターが崩壊してます。
あと姫路瑞希と島田美波の恋愛感情が最初から∞クライマックスです。乙女です。

Q7 ／ PIECE ［PT. 2］

＞i14789―2052＜

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの中の何者かが致命的な発言をした。

「ち、ちがうよ！　ちょっと、お茶目な十六歳につけられる愛称で――」

「そうだ。バカの代名詞だ」

吉井明久が慌てて否定しようとしたところで坂本雄二がとどめを刺した。そのやり取りを見て当麻紗綾はゲラゲラと爆笑していた。

「うわーん、みんなのバカー！」

明久は、そのまま教室を泣きながら走って逃げた。

「って吉井君、待ってください！」

「待ちなさい吉井！」

それを見て姫路瑞希と島田美波が慌てて追いかける。その瞬間、クラスの大半が殺意の波動を漏らした。そして一斉に叫ぶ。

『異端者に死を！』

「おー、ＫＫＫならぬＦＦＦだ」

それを見て紗綾は呑気につぶやいた。

「なにやってんだこのバカどもは！」

バンッと音を立てて机をたたきながら瀬文焚流は雄二の頭を、常に持ち歩いている紙袋でたたく。

「いてぇ！」

「そんなにふざけていると全員補修室へ叩き込むぞ！」

『すんませんでしたー！』

瀬文の死刑宣告とも取れる宣言に一同（ただし秀吉を除く）が、綺麗なまでに一斉に土下座を実行した。

◇

数分後、ＦＢＩのグレイよろしく明久は両側を瑞希と美波によって引きずられながらＦクラスへと戻ってきた。
「そういえば、観察処分者ってどういったことをやるのですか？」
明久の右側で腕をガッチリとホールドしていた瑞希が尋ねる。
「そうね、そういえばどういうの？」
明久の左側で同じく腕をガッチリとホールドしていた美波も同じく尋ねる。
「チッチッチッチッチッ」
その明久の背後から紗綾が舌打ちをしながら現れる。
「紗綾、頭が重いよ。そして姫路さんも島田さんもそろそろ腕を離してくれないかな？」
明久は、さめざめと泣きながらぼやく。
「だめですよ」と瑞希。
「だめよ」と美波。
『やっぱ殺す！』とＦＦＦ団一同。
「いい加減にしろ！」
瀬文が再び怒る。
『すんませんしたー！』
ＦＦＦ団一同は、再び華麗な土下座を実行した。まさに寸分も狂わない正確なシンクロであった。
「まあまあ、落ち着くのじゃ」
それまで空気になりつつあった木下秀吉が、クラス中の人間をなだめる。
「そうだの」
野々村光太郎も秀吉の援護に回った。
「まあ、アレですよ。教師の命令で召喚獣を使って手伝うって奴ですよ。そのために観察処分者の召喚獣は特別に物に触れれるという特性が与えられています」
「そ、それはすごいです！」

紗綾が観察処分者についての解説をし、それを聞いて瑞希は目をキラキラと輝かせながら明久の右腕をギュッと胸に当てる勢いで抱きしめた。
「ひ、姫路さん！　む、胸が！」
瑞希の大きく柔らかな感触を感じた明久はドギマギしていた。
「むっ！」
それを見て美波も明久の左腕を強く抱きしめた。
「し、島田さん痛い！　痛いよ！」
『殺ス、殺ス、マジ殺ス、ブチ殺ス、息ノ根ヲ止メテヤル』
ＦＦＦ団は凶戦士（バーサーカー）へとクラスチェンジしていた。
「あ。でも、観察処分者はその代わりフィードバックで召喚獣との感覚が多少リンクされているんだよ」
「へ？」
紗綾が思い出したかの様に言う。それに瑞希が反応した。
「つまり戦闘でアッキーの召喚獣が殴られたら、何割かのフィードバックでアッキーの身体にも反映されるってわけさー」
ケタケタと笑いながら、紗綾は明久の頭を撫でていた。
『つまり、そうホイホイと召喚できない奴がいるってことか』
「ああ、ザコ同然だ」
「酷いやっ！」
明久は再び泣き出しそうになった。
「プスプスプスプスプス」
そこへ紗綾が、雄二のそばで妙な呼びかけをしていた。
「甘い、すんごく甘いですよ。逆を言い返せば他の生徒の召喚獣では出来ない作戦も立てれるってわけでっせ。すごくない？　マジすごくない？」
紗綾はニヤニヤと笑いながら雄二に顔を押し付ける。
「うっ、ニンニク臭い」
雄二は顔を歪ませた。
「つまり、これだけのピースさえ揃っていれば勝てる可能性もゼロ

パーセントではないということが分かった？」
『そうか、これなら勝てるかも』
『俺たち、いけるか？』
『モテるか？』
『シランガナー』
『オマエモナー』
Ｆクラス中が歓喜に沸き立つ。
「あと、よく召喚することが多いからコントロール面でもアッキーは有利なんだよ。私たちＦクラスは他のクラスにも太刀打ちできるぞー！」
『おぉー！』
「お、おー」
紗綾の掛け声にＦクラス中の生徒たちが叫ぶ。それにつられて瑞希も可愛らしく叫んだ。
「それはそれとして早く開放してよー」
明久は思いっきり忘れ去られていた。
「だめ」
美波は思いっきり却下した。
「酷いっ！」
明久はまた泣いた。
（この状況じゃないと吉井を感じることほとんどないじゃない）
美波は内心、明久のことを思っていた。
（吉井君がそばにいる安心感が感じられます）
瑞希も思っていた。

Ｑ７　／　ＰＩＥＣＥ　［ＰＴ．２］（後書き）

……ＯＫ、相変わらずの低クオリティーでごめんなさい。
というわけでＰＩＥＣＥ完結、次回作にご期待ください……という
ジョークはさておいてようやく先へ進めるお。
次はＤクラスへの宣戦布告です。当然、当麻紗綾が絡んでいるため
原作通りじゃないです。

あ、雄二の役割が最終的に紗綾に乗っ取られていたｏｒｚ
そして大半のキャラが空気になりやすい書き方になっているおｏｒｚ
誰かオラに小説を書くＳＰＥＣを！

〔今後の流れについて〕
今後の流れとしましては、やはり大筋はバカテス１巻の流れです。
そこへ若干のオリ話も混ぜ込んでカオスになりそうな予感！
広げすぎた風呂敷が畳みきれない！
さあ、どうするどうなる俺！？

本当に続くのか俺？

Ｑ８　／　ＣＡＬＬ（前書き）

本作は「ＳＰＥＣ～警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロスオーバーファンフィクションとなっております。
原作崩壊してます。
文章崩壊してます。
キャラクターも崩壊してます。
いろいろ崩壊してます。
ボスケテ、たすてけ。

Q8 ／ CALL

＞i14789―2052＜

「というわけで、明久。お前にはDクラスへの使者として宣戦布告をしてもらいたい」

坂本雄二は、吉井明久の両肩をつかみながら言う。

「それなら、さっき紗綾が『ちょっくらDクラスへ殴りこみしてくりゃー』って叫びながら行っちゃったよ？」

「なにぃ！　それじゃ面白くねえだろ！」

「酷っ！」

明久は、泣きながら教室を再び出た。

「って吉井君！」

「って吉井！」

毎度ながら姫路瑞希と島田美波も揃って飛び出した。

『吉井の野郎、なんでアイツだけ……』

ＦＦＦ団は、嫉妬のオーラを増幅し続けていた。

「……なんなんだよ、このクラスは」

瀬文焚流は、ため息を吐きながらつぶやいた。

「まあまあ、元気な証拠じゃよ」

野々村光太郎は、そんな瀬文を優しく諭した。

「がんばれ、若人よ」

野々村のつぶやきは、春風と共にこぼれる。

◇

「入りまーす」

突然Ｄクラスの教室に若い女の声がこだました。

「あれ？　雅先生？」

Ｄクラスの生徒である玉野美紀が女に声をかける。女の名は正汽

雅、文月学園の社会を担当する教師である。
「Dクラス代表にお客様が、張り切ってどうぞ！」
雅がそういうと、その背後から当麻紗綾が現れる。
「ういーっす」
「今度は紗綾ちゃん？」
美紀は紗綾の元へ近づいた。
「ん？　おろろ、たまっぺじゃん。どーしてここにーいるみゃー？」
「だってDクラスだから」
「なるほど。それでさー代表は誰みゃー？」
紗綾が美紀に尋ねると、美紀は教卓のほうへ人差し指を指す。
「おー、あんがと山脈」
「どういたしまし天狗」
妙な言葉遣いは紗綾からしっかりと感染していたのであった。そして紗綾はそのままDクラス代表の元へ近づいた。
「どーもはじめましてー、Fクラスの当麻です。Dクラス代表の光GE○JIさんに会えて感激です」
「光じゃない！　平賀だ！」
光GEN○I……もとい平賀源治は、大声で訂正した。
「本日は我がFクラス代表のスロープからの言伝があるんだけど、聞きたい？　聞きたい？」
紗綾は、そんなことをお構いなしに平賀に顔を近づける。
「うっ、ニンニク臭い」
紗綾の口から放たれるニンニクの臭いに平賀は顔を歪める。
「相変わらずあそこの餃子が好きだね、紗綾ちゃん」
美紀は、紗綾のことを分かっているのか平然としていた。
「えーっと、たぶん分かると思いますけど、我がFクラスはー、Dクラスに宣戦布告しちゃったり！　てへー」
可愛い娘ぶりながら紗綾は、堂々と……とは言えるかわからない宣戦布告を宣言した。
「はぁ……」

あまりの出来事に平賀は思わずため息を吐いた。
「というわけで、今日の午後開戦しまーす！」
『な、なんだってー！』
なぜかミステリーを調査する人たちが叫んでいた。
『ってどこから現れたー！』
Dクラス一同が一斉にツッコミを入れた。
「紗綾ー！」
そこへ明久が現れた。
『かかれー！』
一斉に明久に襲い掛かった。
「ぎゃー！」
明久が襲われるのを見て、紗綾はゲラゲラと笑った。
「きゃー！　アキちゃーーーーーーーーーん！」
美紀は、女子の制服を手に明久の下へ向かった。
「……なに、このカオス」
平賀は、一連の怒涛とも言える展開に一人呆然としていた。
「吉井君！」
「吉井！」
そこへ瑞希と美波も入った。
「って姫路さんがFクラスー！？」
瑞希の姿を見て平賀は驚いた。
「ってお姉さま！」
清水美春は、美波の姿を見て標的を変更した。
「って美春ー！？」
美波は、襲い掛かってきた美春を回避してDクラスから逃げ出した。
「待ってください、お姉さまー！」
美春は、そのまま美波を追いかける。
「あ、バレちった」
紗綾は、心の底から謝る気配の無い謝罪を雄二にしながら明久と

瑞希を回収してＤクラスを後にした。
「……光Ｇ〇ＮＪＩより嵐と言ったほうが正しいよな」
あまりのカオスな光景に平賀は現実逃避した。

Ｑ８　／　ＣＡＬＬ（後書き）

クオリティーの低下と劣化が激しく進行しちゃってるぅぅぅぅぅ！

というわけで第８話でした。

次回は対Ｄクラス作戦会議です。

原作と違ってＤクラスに最初から姫路さんの存在がばれちゃってるよ！

どうしよう！

そしてニンニクの臭いをうまく表現できない！

ボスケテー！

あー、ＳＰＥＣが最終回を迎えてしまったわけですが……第２シーズンまだですか？すごく気になる終わりだったので。

あ、そうそう。ｋｉｎｅｃｔが来ました。うん、おもしろいよマジで！

なにこれ！すげぇよ！

未来を見た気がした。そのうちマイノリティーリポートのゲーム版が出るとしたらｋｉｎｅｃｔを使って欲しい！あのインターフェースをリアルに使いたい！

【小ネタ】

〔光○ＥＮＪＩ〕

平賀源氏と光ＧＥＮＪ○って響きが同じだよね？

〔ミステリーを調査する人々〕

定番のネタですね。そしてＯＦＰ：ＤＲの日本公式サイトとコラボレートしたときは思わず噴き出したのを今でも思い出せる件ｗｗ

Ｑ９　／　ＲＯＯＦＴＯＰ　［ＥＰＩＳＯＤＥ　ＯＮＥ］（前書き）

毎度ながらですが本作は「ＳＰＥＣ　～警視庁公安部公安第五課
未詳事件特別対策係事件簿～」と「バカとテストと召喚獣」のクロ
スオーバーファンフィクション作品です。
色々と崩壊がどすこい進んでいルンバ。
だれかオラに小説を書くＳＰＥＣを分けれー。

Q9 ／ ROOFTOP ［EPISODE ONE］

＞i14789―2052＜

「ただいマンゴージュース果実百パーセント」

当麻紗綾は、古い時代の親父ギャグをかましながらFクラスの教室に戻ってきた。

「古っ！」

坂本雄二は思わずツッコミを入れた。

「大変でっせー。姫路さんの存在バレちった」

『な、なんだってー！』

紗綾の報告に、なぜかDクラスに居たはずのミステリーを調査する人たちが現れて叫んだ。

『どこから入ってきたんだー！』

思わずFクラスの大半の生徒が大声でツッコミを入れた。

「スロープが余計なことを言うから、すんげーややこしくなっちったよ」

「俺のせいかよ！」

「十分に雄二のせいだと思うよ」

ようやく戻ってきた吉井明久は、制服がかなりボロボロになっている状態になりながら雄二に掴みかかる。

「死ぬって！　やっぱり使者は死者になってしまうよ！」

「こんなときにうまいこと言うんじゃな」

思わず木下秀吉はツッコミを入れる。

「よ、吉井君。大丈夫ですか？」

「吉井、大丈夫？」

姫路瑞希と島田美波は、明久の下へ駆け寄る。

「う、うん。平気だよ！」と、明久は腕をぐるぐると回して平然を装う。

「よ、よかったですー」と、ホッとする瑞希。

「本当に良かったー」と、一安心する美波。
「あらら、これは面白いですなー秀吉さーん」
恋する乙女たちを見て紗綾は木下秀吉に猫が飼い主に擦り寄るように近づいて声をかける。
「そうじゃのう……って紗綾、ニンニクの臭いがちょっとキツイのじゃが……」
秀吉は紗綾の口から放たれるニンニクの臭いに顔を歪める。
「あ、スロープ。私はちょっとばかり中部日本餃子のＣＢＣに所用があるのでしばらく失礼しやす」
「って紗綾！　これから作戦会議なんだけどー！」
教室……否、学校から出ようとする紗綾を明久は必死で止める。
「えー、面倒だしー。それにＤクラスぐらいなら大丈夫でしょ？でしょ？」
「いや、Ｄクラスにお前の実力を叩きつけたい。当麻、お前も来てくれ」
雄二の参加要請に紗綾は「うへぇ」とうめいた。

◇

明久、瑞希、美波、紗綾、雄二、秀吉、土屋康太は屋上にいた。
「当麻、ちゃんと宣戦布告してきたな？」
「もちろんぱ、今日の午後開戦と伝えタングステン」
雄二の確認に紗綾は妙な語尾を付けながらで答えた。
「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」
「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはマトモな物を食べろよ？」
雄二の言葉に明久はウッと言葉を詰まらせる。
「え？　吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
瑞希は驚きながら明久を見る。その視線に気づいた美波も明久を見る。
「いや、一応食べてるよ」

「アッキー、塩と砂糖と水が主食なのは止めといたほうがいいヨンケル」
「え？　そうなんですか？」
紗綾の回答に再び瑞希は驚いた。
（そんなわけでお二人さん、アッキーに弁当を作ってあげたら好感度アップ間違いナッシングローバル）
（ふぇ！？）と瑞希。
（へっ！？）と美波。
恋する乙女たちと応援する者にとってアイコンタクトでの意思疎通は基本スキルだったのであった。
「あ、あの！　良かったら私がお弁当作りましょうか？」
「う、ウチも作ってあげるわよ！」
「へ？　いいの？」
瑞希と美波のいきなりのアピールに明久は喜びに満ちた。
「……妬ましい！」
康太はそんな明久にしっとのオーラを体中に充満させていた。

Ｑ９　／　ＲＯＯＦＴＯＰ　［ＥＰＩＳＯＤＥ　ＯＮＥ］（後書き）

長く掛かって本気で正直スマンカッタ（，・ω・、）
というわけでＱ９です。ちなみにＥＰＩＳＯＤＥ～って書かれている場合は同じサブタイトルを使いまわすことを意味してます。
ああ、今回は小ネタを仕込んでなかったおｏｒｚ
そしてケイゾクが見たいお。それでバカとケイゾクと召喚獣もしくはバカと弐係とケイゾク、暴走するとバカとＳＰＥＣとケイゾクと召喚獣というネタで一作やってみたい気持ちがあります。エクセレント、ワンダフル、トレビアーンってね。

あと、Ｔｈｅ　３ｒｄ　Ｂｉｒｔｈｄａｙを買いました。面白いっすよ、ＰＳＰ用のアクションＲＰＧとしては結構良くできていて、全体的に高めの難易度が手ごたえを感じさせるのがＧｏｏｄ。ＥＡＳＹでもそれなりに程よく難しいと感じさせるのもＧｏｏｄ。

あと、たまにＸｂｏｘＬＩＶＥに出没するのはいつも通り。相変わらずゲーマータグは【ｆｏｒｄｆｏｒｅｓｅｔ】です。
ツブヤイター……じゃなくてＴｗｉｔｔｅｒも相変わらずやってます。こっちも【@ｆｏｒｄｆｏｒｅｓｔ】なのも相変わらずです。

あと少しで２０１０年も終わりますね。
今年出たゲームで一番驚かされたのは【レッドシーズプロファイル】です。なんていうかメインとなる物語や、それをさらに彩るサイドストーリー、魅力的なキャラクターたちが印象に残る。今でも鮮明に思い出せるほどだ。興味があったら是非やってみてください。万人向けではないんだけど、ハマル人はハマル。特に海外ドラマが好きな人なら。（ツインピークス見てないけどツインピークスが好きな人なら分かるネタがあるみたいですよ）

あ、毎回のことでアレだが後書きも本編も前書きも全てカオスだなー。

SPECIAL OI ／ X'mas 2010（前書き）

クリスマススペシャルストーリーです。かなり短いです。
相変わらずですが「SPEC」と「バカテス」のクロスオーバーです。
ツッコミどころ満載だYO！

SPECIAL Q-I ／ X'mas 2010

十二月二十四日。
俗にクリスマス・イヴと呼ばれるその日、吉井明久はクラスメイトの当麻紗綾につれられて中部日本餃子のＣＢＣへとやってきた。
「紗綾、今日はクリスマス・イヴなんだけど……」
「だからですよ。どうせアッキーのことだから一人で寂しくしてるんじゃないかと思ったから」
「うう、あまり言わないで」
明久は涙をダバダバと流していた。
「だ・か・ら、中部日本餃子のＣＢＣの親父さんに相談して今日はアッキーに餃子を振舞っちゃおうかなーっと思いましてー」
「え？」
紗綾の言葉に明久はキョトンとした。
「おう、そこの嬢ちゃんが『万年金欠のウルトラバカに餃子をたーんと食べさせてやってくだっせー』と言ってきたからな」
そこへ中部日本餃子のＣＢＣの親父が、明久に説明をする。それを聞いて明久は目に涙を浮かべる。
「さ、紗綾！　ありがとう！」
明久は思わず紗綾に抱きついた。紗綾は少し頬を赤らめる。次の瞬間には、島田美波と姫路瑞希が明久の両腕をガッチリとホールドした。
「アキ、覚悟はいいわね？」
「明久君、残念です。私たちがいるのに……」
通常方向とは逆方向に間接を曲げた。ポキッと何かが折れる音と共に明久の悲鳴が中部日本餃子のＣＢＣの店内中に響いた。
「保険に入らない？」
店員であるチリ人のアラータが明久に保険勧誘を勧めていた。
そんな雪が降るクリスマスの夜の出来事。

ＳＰＥＣＩＡＬ　ＱＩ　／　Ｘ'ｍａｓ　２０１０（後書き）

遅くなりすぎなクリスマス話です。そして新年のスペシャルストーリーも執筆する予定です。
はい、時期はずれです。本当にごめんなさい。ｍ（＿＿）ｍ
さて、次回は学園長が登場します。茶飲み友達が出ます。オリジナル設定満載です。ある意味でバレバレです。予想が付いた人はツッコミを。

そういえば５ｐｂの科学アドベンチャーシリーズ最新作のテイザームービーが出ましたね。ロボティクスノーツ、ぜひプレイしてみたい。その前にＣｈａｏｓ；ｈｅａｄ　ＮＯＡＨを終わらせないとｏｒｚ

ここ最近、久しぶりにＰＳＰを稼動し続けています。平行していつも通りＸｂｏｘ３６０もまったりとプレイ。あ、そうそう。ＤＥＡＤ　ＲＩＳＩＮＧ　２　ＣＡＳＥ：ＷＥＳＴをプレイしました。いやはや、フランクさん相変わらず大暴れですよ。そしてカメラ復活キタ――――（・∀・）――――！！
もしＣＯ－ＯＰで一緒になったときは、是非ゾンビパラダイスを楽しみましょう！

あー、小説を書くＳＰＥＣは何時になったら俺に備わるのだろうか。

Q10 ／ TEATIME ［EPISODE ONE］（前書き）

えー、毎度のことで恐縮ですが「ＳＰＥＣ」「バカテス」のクロスオーバーです。
今回は学園長（以下、ババァ）とゴリさん（以下、係長）の話です。
若い者はアウトサイドです。

Q10 ／ TEATIME ［EPISODE ONE］

＞i14789―2052＜

コンコンと学園長室の扉が音を鳴らす。

「入りさね」

文月学園の学園長である藤堂カヲルは、音を鳴らした主に対し声をかける。ガチャリと音を立てて扉が開く。

「おや、これは学園長殿」

そこに現れたのは、用務員の野々村光太郎。

「ふむ、あんたが来たってことは」

「そうじゃよ、まあお茶でもどうだ？」

そう言いながら野々村は手にしていた和菓子のパックを掲げる。

「いいさ、ちょうど休憩にしようとしていたところじゃし」

「そうじゃそうじゃ、根を詰めても良い結果は得られんしのう」

野々村は、当たり前のように急須の蓋を開け、湯と茶葉を入れる。

「今日は玉露入りじゃ」

「へえ、珍しいじゃない」

藤堂は驚きを隠さず言う。野々村は笑いながら急須を眺める。

「あ、そうじゃ。その間に柿ピーは？」

「少し貰おうかのう」

野々村が懐から取り出した柿ピーの詰まった瓶を見て、藤堂は催促をする。

「丁度良い頃合じゃな」

そう言いながら湯のみに注ぐ野々村。こぽこぽと音を立てながら湯のみに茶が注がれてゆく。緑色に透き通る液体は太陽の光に照らされて少し光を跳ね返す。その湯のみを野々村は藤堂に渡す。

「ありがとう」

「いえいえ、学園長はがんばっているから野々村光太郎、男として藤堂カヲルに労いをかけただけじゃよ」

お互いに笑いながら茶をすする。
「相変わらず入れ方がヘタじゃな」
「うっ、それは言わないデスティニー」
藤堂の指摘に野々村はあせる。
「それと社会の雅先生と浮気しているらしいじゃないの」
「ギクギクぅー！」
更なる指摘に野々村は声に出してはいけない擬音を口にしながら、冷や汗をかく。
「あまり過ぎると学園の評判に関わるの分かっているじゃろ？」
「まあ、それはそれとしテーブルクロス引き」
あさっての方向を見ながら野々村は話題を変える。
「二年のＦ組の子達が早速戦争を起こすのは知っているＪＡＲＯ？」
「放送倫理機構は置いといて、その話なら高橋女史から聞いておる」
「若いっていいねぇー、元気があって。まるでわし等が昔文月学園で勉学を学びぬいた頃を思い出すのう」
「そうじゃね……ってあの頃はまだあんた問題児じゃったろ」
「あれ？　そうじゃったっけん玉」
お互いに笑いあいながら再び茶をすする。
「ああ、そうじゃ。どうも内務監査部（アグレス）の奴らからの報告で怪しい動きをしている教員がいるようじゃ。こっちでも調べは続けるが気をつけるのじゃぞ、藤堂カヲル学園長」
「そちらこそ気をつけるべきじゃないのか、野々村光太郎理事長殿」
野々村は「ハッハッハッハッハッ」と笑いながら柿ピーの入った瓶を少し振る。
「なに、若人のためなら男、野々村光太郎はがんばれるのじゃ」
その笑顔は、どこか決意に満ちていた。藤堂は、そう思いながら窓の外から見える空を眺めながらつぶやく。
「本当に……初恋の相手は相変わらずじゃのう」

Ｑ１０　／　ＴＥＡＴＩＭＥ　［ＥＰＩＳＯＤＥ　ＯＮＥ］（後書き）

えー、マジでごめんなさい。
オリエピソードです。
と言うわけで第１０話です。
色々とオリジナル設定が飛び出しました。
何と言うか……無理ありすぎだろＪＫ。

ババァと係長が同級生で、しかもババァの初恋の相手は係長ってどんだけトリッキーな設定を作っちまったんだよ俺えぇぇぇぇ！
だけど、年齢的に近そうだったからつい勢いで……後悔先に立たずｏｒｚ
ババァの口調が思いっきり秀吉と被ってるおｏｒｚ

そして何よりも係長が理事長って設定が一番無・茶・あ・り・す・ぎ・る・だ・ろ・俺・！

もうね、風呂敷を広げすぎてだんだんと畳むのがきついお。
誰か、この風呂敷ボスケテ。

ところでお茶っていいよね？
そして津田さんの出番って多い方がいいかな？

あと、学園長の初恋エピソードを見たいって人いるのかな？

Q11 ／ CBC LUNCHTIME <／> ROOFT

遅れてごめんなさい&短くてごめんなさい。
久しぶりのバカスペです。
二つの舞台をまたがっての話になります。
毎度ですがアレとアレのクロスオーバーです。

Q11 ／ CBC LUNCHTIME <－－> ROOFT

いつの間にか吉井明久は、当麻紗綾によって中部日本餃子のＣＢＣへとつれて来られていた。
「ねえ、姫路さんと島田さんがすごい気迫で僕らを止めようとしてたけどいいの？」
「大丈夫ですよ。あの二人には事前にここに来ることを教えてありますから」
「そっかー、それなら安心……じゃない！」
店の片隅でカタカタと震える明久を見て紗綾はゲラゲラと笑う。

【９回裏】

それは、ほんの一時間前の出来事。屋上で作戦会議を繰り広げていたＦクラスの面々は各々、昼食をとろうとしていたときだった。
「おい、明久。今日こそマトモな昼飯食べろよ」
「ほぇ？」
坂本雄二の言葉に明久は首をかしげる。
「ちゃんと食べてるよ」
「あれは、食べているとは言わんじゃろ」
明久の反論に対し、半ば空気になりかけてきた性別を超越せし者、木下秀吉がツッコミを入れた。だが男だ。
「え？　吉井君って食べない人なんですか？」
まったく話を左から右へと聞き流していた姫路瑞希が驚く。
「そういえば、いっつも吉井ってあまり食べてないわよね」
そこへ島田美波も参加する。
「お前の昼飯って、いっつも水と塩だけだろ」
「砂糖もちゃんと食べてるよ！」
坂本の暴露に明久は反論をするが、五十歩百歩であった。
「それは食べてるとは言わんぜよ。とりあえずアッキー、中部日本

餃子のＣＢＣで餃子でも食べなっせ」
そう言いながら、紗綾は明久の腕を取って屋上を離れる。
「って、待ちなさい紗綾ー！」
「って、待ってください当麻さーん！」
それを見て恋する乙女たちは同時に追いかけ始めた。

【１１回表】
「それで、ちゃんとお金持ってるんだよね？」
「大丈夫、大丈夫。ちゃーんとここに……ってアレ？」
紗綾が愛用の赤いキャリーバッグを指した時、ポカンと口を開けてキャリーバッグの中身を出し始めた。中からはＤＳ、ＰＳＰ、ｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈ、携帯電話各種、バナナ、アヒルちゃん人形、中部日本餃子のＣＢＣのマスコットキャラクターのストラップ、Ｘｂｏｘ３６０本体、ｋｉｎｅｃｔ、ノートパソコン五台、などが出てきた。
「ど、どれだけ入っているの？」
明久は若干引き気味だった。

Q11 ／ CBC LUNCHTIME <／／> ROOFT

えー、なんといいますか……やっぱり小説を書くＳＰＥＣがほしいよ。

そしてようやく就職活動が終わってひと段落が着いたと思ったら最初はバイト扱いなので早速仕事してます。

仕事内容は機密情報があるため言えません。

他の作品（バカと次女と召喚獣およびバカと未詳とＳＰＥＣ）も進めないといけないし、完全にＳＴＯＰしちゃってる作品（ＧＴＡワンセントアサシンなど）も復活させないと……。

ああ、頭が痛いお。

（ちなみに９回裏とか１１回表あたりのネタは同じＴＢＳのドラマからと言えば分かるかな？）

Q12 ／ SCHOOL HEAD［EPISODE ONE］（前書き）

ひっさしぶり（だいたい半年以上）のバカスペです。グデグデです。

Q12 ／ SCHOOL HEAD［EPISODE ONE］

【11回裏】

ダラダラと汗をかく当麻紗綾を見て、同じようにダラダラと汗をかく吉井明久。

「まさか？」

「そのまさか」

「マジ？」

「マジ」

次の瞬間、二人は中部日本餃子のＣＢＣの親父に首根っこを掴まれた。

【12回表】

二人は学園長室にいた。目の前には文月学園の学園長である藤堂カヲルが眼をギラリと光らせながら見る。二人の横には中部日本餃子のＣＢＣの親父が立っていた。その背後には理事長であるはずの野々村光太郎がオロオロとしていた。

「で、いくらさね」

「一万飛んで八百円」

金額を聞いて藤堂カヲルは「はぁ……」とため息をついた。

「別に逃げたわけじゃねーし、つか食い逃げなんて罪状は法律上存在しないし」

「え？　そうなの？」

「本当に？」

野々村と明久は驚いた表情をしながら紗綾を見る。藤堂はハァと溜息を吐きながら小切手を取り出し、慣れた手つきで金額を書き、中部日本餃子のＣＢＣの親父に手渡す。

「毎度あり」と言いながらドカッと椅子に座る。

「で、このクソジャリどもが学園一のバカと天才さね？」

「おお、まさかの……当麻です。どうぞよろしく」
「吉井明久です」
「ま、まあ二人共いい子じゃよ」
野々村は二人を弁解するが藤堂は「ふんっ」と一蹴する。
「二人には反省文を書いてもらうからそのつもりでな」
明久は明らかに落ち込むが、一方の紗綾は手にしているキャリーバッグの中からゴソゴソと何かを取り出す。
「紗綾、それは？」
「盗聴器発見器ー」
某猫型ロボット風にそれの名称を言いながら紗綾は、あたりを見渡す。そしてキャリーバッグの中からマイナスドライバーを取り出し、いきなりコンセントのカバーに差し込んで無理やりこじ開ける。そして中から小型の黒い盗聴器が出てきた。
「うわー、セキュリティーがったがたですなー。学園長のシワ並みにがったがたですなー」
「なっ！」
思わぬ物体に藤堂は驚く。
「え？」
明久も驚く。
「なんとっ！」
ついでに野々村も驚く。
「大変だねー」
さらについでに中部日本餃子のＣＢＣの親父も驚く。
「って、またいたんですかー！」
ついでにキャリーバッグの中から赤い物体がポロッと落ちた。
「あ、私の財布……すみませんでした」
いそいそと野々村に金を返す紗綾という構図に締まらない雰囲気となった。

Q12 ／ SCHOOL HEAD［EPISODE ONE］（後書き）

つづく……のか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8254o/

バカとSPECと召喚獣

2011年12月28日02時50分発行